

- 社会参加する仏教 第(4)回

混迷する現代社会に対し、われわれ浄土宗は何を放つ存在であり 得るのか。

法然上人の説かれた「愚者の自覚」に立ち返って、肥大する数々の課題をどのように向き合うことができるのか。

国際的な活動を展開される遠藤師にご寄稿いただきました。

催涙弾を受けて知る パレスチナの涙

石見教区和田寺住職 念仏サンガ/NPOユニ代表 遠藤喨及

気がついたら、イスラエル兵の撃つ催涙弾の下を逃げ回っている僕がいた。 気がついたら、路上でボランティア指圧をしている僕がいた。 彼らは、イスラエル警察に自宅を追い出されたパレスチナ人家族だった。 どちらの時にも涙が流れていた。

それは、パレスチナ人たちが流している涙だった。悲しみ、悔しさ、怒り……。 "どうして、人が人に、そんな非道なことができるのか? まさか、こんな理不尽なことが、行なわれていたなんて……。" これらは、僕が、パレスチナにいる間、何度もつぶやいた言葉だ。 パレスチナで僕は、やり場のない怒りをもてあまし、いくども空を見上げていた。

■中東の実体

これまでイスラエルには、湾岸戦争の年から数えて、9回ほど行っていた。しかし、パレスチナに足を踏み入れたことはなかった。行こうとしても、イスラエル人に止められていたからだ。そして、恐ろしい話ばかり聞かされていた。

"パレスチナ人たちは、皆んなテロリストだ。奴らは気の狂った恐ろしい連中だ。エルサレムに行くと、外国人は殺される。"

なるほど、それは、一般のメディアが流しているパレス チナ人のイメージと、さしてかけ離れたものではなかった。だから、それがプロパガンダ (宣伝)によって作り上げられたイメージだったとは、その時の僕には知るよしもなかった。

「事実は小説よりも奇なり」である。僕はパレスチナに 実際に行って、この目で見て、そしてはっきりと知った。 世界で流れている中東ニュースが与えるイメージの多く が、でっちあげだったということを……。加害者とされた 人々は、実は被害者だったのだ。

本で読んだだけでは、中東の実態はわからなかった。やはり何ごとも、自分で体験してみなければわからないものだ。それにしても、僕が見た範囲ですら、実際に起こっていることは、想像をはるかに超えていた。

■報道のウソ

例えばあなたの家にヤクザが押しかけて来て、あなた

たち家族を銃で脅し、追い出したとしよう。

追い出されるにあたって、娘さんは殴られて前歯を折られ、奥さんも肩をねじ上げられた。(この部分は、僕自身が行った聞き取り調査によるもの)武器を持っていないあなたたち家族は、こうして、やむなく家を出た。畑もヤクザに奪われた。

しかし、お父さんとしては、このまま泣き寝入りするわけにはいかない。と言っても、せいぜいできるのは、石を投げつけることぐらいだ。

石を投げた結果が、どうなるか?。催涙弾を撃たれる。 小銃で撃たれることもある。戦車が来ることすらある。妻 は負傷。幼い方の娘は死んだ。血気盛んな息子は、"明日 も村の皆んなで怒りの抗議に行く"という。

しかし、石を投げた罪であなたはイスラエル兵に逮捕され、刑務所に拘留されるかも知れない。あなたは、なすすべもない。"一体、俺たちが何をしたって言うんだ!?"と地面をかきむしる。

僕は不思議である。どうしてこんな状況を、イスラエルとパレスチナの「紛争」とか「対立」という言葉で報道するのだろう? 一方的に奪う者と、奪われる者という関係があるだけなのに。パレスチナはイスラエルの占領下にあるのだ。

■入植者と分離壁、そして検問所

ある日、あなたの家の近くに高さ8メートルもの壁が 建築されたとしよう。その壁は、延々と続いている。それ は、単に見通しが悪くなっただけではない。 遠藤 院及(えんどう りょうきゅう) 10歳より13歳まで、ニューヨークで暮らす。日本指圧 専門学校卒、中央仏教学院卒(通信)。その後、浄土 宗の僧籍に入る。

1991年頃より、北米、ヨーロッパ、中東、オセアニア等の世界各地で、タオ指圧の講習、念仏ワークショップ等を行なう。その足跡は、現在、世界8カ国にネットワークを持つ、念仏サンガ/NPOユニとなる。

タオ指圧の創始者としては、「気心道」(だいわ文庫)、「<気と経絡>癒しの指圧法」(講談社+α文庫)等、数冊の著書がある。

一方、音楽家としては、「ウォーター・ブラネット」(ラ イアル・ワトソン推薦版)など、5枚のCDアルバムが あり、テレビ・ラジオ等でオンエアーされている。 ウェブ:www.taosangha.com。



あなたは、もう自分の畑に自由に農作業に行くことができなくなったのだ。もはや生活の手段はない。畑は奪われたのだ。

一体誰が何のために、こんな壁を建てたのか? イスラエル人の入植地ができたためである。イスラエル政府は、入植者の治安のためという名目で分離壁を建設し、入植地には兵士がいて、入植者も銃を持って構えている。

土地を奪われ、生活の手段を失ったパレスチナ人たちが抗議のデモに行く。すると、イスラエル兵は催涙弾を ぶっ放す。またイスラエル兵は、深夜に村を襲撃し、デモ に参加した若者を逮捕しに来る。

一方の、イスラエル人入植者たち。ユダヤ教原理主義者が多い。彼らの行為は異常である。 信じられない話の数々である。

牛の世話をしているパレスチナ人の家族の所に、突然、車でやってきて、おばさんを棒でめった打ちにする(この映像は、Youtube「入植者パレスチナ」で検索し見ることができる)。

通学中のパレスチナ人たちの子供たちを殴る(このため、キリスト教の団体が、子供たちを守るために、集団登下校の引率をしている)。

家を売ってくれとやって来て、断ると家に火をつけ給水 塔を壊し、抵抗した家族を殺す(僕は、そこの子供に、実 際、家を見せてもらった)。

ひそかに夜中に侵入し、オリーブの木を切り倒し、家畜 を殺す。

しかも殺人を犯しても農場を荒らしても、犯人のイスラエル人は逮捕されない。たとえ被害にあっても、パレスチナ人は泣き寝入りするしかない。

また、場所によっては、学校に行くのにも通勤するのに も、毎日、検問所を通過しなければならない。

しかも、通過はイスラエル兵の気分次第だ。時には、何 時間も平気で待たされ、食事もできず、家に帰れない。救 急車ですら止められ、助かるはずの人が死ぬことだってあ る。

人間の尊厳など、当たり前のように踏みにじられている 毎日だ。占領され、支配され、自由を奪われるとは、そう いうことだ。

■NPOユニとしての活動

ここでざっと、8月6日~17日間の活動等について述べておきたい。

まず、2日間の「イスラエル・パレスチナ平和会議」に参加し、"気と心のワークショップ・仏教カウンセリング" の講習を行なった。

その後、ナブルス難民キャンプに行き、日本アラブ未 来協会の田中氏を手伝う。また、かつて虐殺があったとさ れるジェニン村にも行く。

ヘブロンに移動し、理学療法協会で、「タオ指圧講習」 を行なう。

さらに、ビリン村に行き、分離壁の抗議デモに参加。イスラエル兵の撃つ催涙弾の下を逃げ回り、涙の中でパレスチナ人のくやしさを想う。

東エルサレムに滞在。不当に自宅を追い出され、路上 生活をしている家族を訪ねる。聞き取り調査と、路上での ボランティア指圧をする。

西エルサレムでは、イスラエルの人権団体を訪問(彼らは、イスラエルによるパレスチナ人の家の破壊に反対している)。この団体が主催する、破壊された家を回るツアーは、満席で断念。

最終日。家の破壊を、イスラエル警察に宣告されている80家族の住む地区を、他の支援者と共にパトロール。 その足で、飛行場に向かう。

■パレスチナの非暴力抵抗運動

帰国後は、Tシャツ製作のプロジェクトを準備し始めた。パレスチナ人=テロリストというイメージを払拭するためだ。デザインは、ガンジーの肖像画と「パレスチナ非暴力の抵抗運動」という英文字。また、これを現地で製作し、彼らの仕事にもなればと思う。

Tシャツは、海外からのデモ参加者に配ったり、支援者に買ってもらったりする。世界の人々に見てもらいたい。

また、これの販売による収益は、パレスチナの村の活動 資金になる。パレスチナ人活動家たちともコンタクトを取っ て進めているが、彼らもこのプロジェクトを喜んでいる。

余談だが、このプロジェクトを始めることができたのは、"坊ちゃん"というあだ名の古い友人より、Tシャツ制作のためにと、寄付の申し出があったお陰である。

"坊ちゃん"とは、ずっと、はるか以前、インドを貧乏旅行している時に知り合った。ガンジス河沿いにある、一泊500円もしない同じ安宿で、お互い何週間もウロウロしていた仲である。

縁とは不思議なものだ。今回、パレスチナのTシャツ・ プロジェクトのために、彼と20年振りで会った。すると



社会参加する仏教

坊ちゃんは、いつの間にか"社長"に変身していた。でも、 気持ちは相変わらず"熱い"。坊ちゃんは、やっぱり友だち だった。

■各自ができる何かを

パレスチナでは、信じられないような非道なことが行な われていた。しかし同時に、信じられないような、人間の 優しさにも数多く出会った。

"いい匂いだね"と誉めただけで、売り物のパンをくれる パン屋の少年。旅人にお茶をごちそうしてくれる、屋台の お茶屋の兄ちゃん。

田舎道を歩いていると、"どこまで行くんだい、送って行 こうか?"と声をかけてくれる仕事帰りの家族。僕はパレス チナほど、安心して旅したところはなかった。

そして、優しかったのは、パレスチナ人たちばかりでは なかった。

海外から、多くのパレスチナ支援者がやって来ていた。 彼らは優しく、気負いもなかった。

そして、危険を伴うデモに参加し、路上でパレスチナ 人家族たちと共に寝起きしていた。村で深夜のパトロー ルをし、逮捕されることも恐れず、イスラエル兵からパレ スチナ人たちの人間の尊厳を守ろうとしていた。

虐げられた人々の役に立ちたいという、共通の想いを



難民を路上で治療する遠藤さん(東エルサレムにて)

持っているためだろうか、パレスチナでは、海外から来た 支援者と、すぐに友だちになることができる。

僕は日本の皆さんに、特に熱い気持ちのある人に、ぜ ひこんな世界もあるのだということを知ってもらいたいと 思った。

そして、できれば、現地に足を運んでもらいたい。ま た、多少の危険は伴うが、デモにだって参加してもらいた い。人々の苦しみを肌で感じ、その現状を変えるために何 かをして頂けたら……と切に想い、またそう願う。

その瞬間、"自分はたしかに生きている"と感じることが できるから。

浄土宗平和協会は、平成22年2月23日から 8日間、恒例のスタディーツアーを行う。

第5回の今回は、JPA副総裁で大本山光 明寺法主の宮林昭彦台下を団長に、キリスト 教ローマカトリックの中心バチカンを訪れ、 ローマ法王に謁見するほか、カトリックの修 道院を訪問、厳格に修行をしている修道士の

信仰を学ぶ。カトリックの「諸宗教 の対話プロジェクト」の協力。

このほど、宗報などで平和協会 会員ならびに全国の浄土宗御寺院 に参加者を募ったところ、40人を 超す参加者に恵まれた。またバチ カン側の受け入れ体制の連絡待 ちで、参加待ちの参加希望者もあ り、ローマ法王庁側の体制が整い

次第、すべての希望者に参加いただけるよ う、努力をしている。ツアーでは、バチカン、 修道院研修のほかに、ローマ、フィレンツェ、 ベネチア、ピサなどを訪れ、観光を楽しむ。

料金は28万円(浄平協会員)、29万5千円(一 般)。すでに申し込みを締め切った。



バチカンのサンピエトロ寺院